

届かない手紙

水無飛沫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロザミアさんのSSRフェイトその後、みたいな感じです。

グラン×ロザミア。

細かい点は気にしない人のみ閲覧お願いします。

R指定の基準がいまいちわからないですが、凄く微妙な濡れ場があるのでR-15にさせていただきます。

目次

届かない手紙

1

届かない手紙

大好きで、あれだけ会いたかった家族はもういない。

——私が逃げ出したから、殺されてしまった。

涙は出ない。心のどこかで覚悟はしていたのだろう。

自分の中の何かが欠落してしまったような感覚。

ああ、これで私は本当の意味で……。

鏡が私の姿を映し出している。仮面をつけているせいか、表情は読み取れない。

外すことすら忘れていたようだ。

仮面に手をかけ外そうとして——

「うそ……」

思わず口から声が漏れる。

そんなはずはない。今までそんなことはなかった。

仮面が外せないなんて、そんなわけ……。

背筋が凍るような恐怖心に駆られて、仮面を引き剥がそうと力を入れる。まるで顔と一体化してしまったように、どうしても？がすができない。これだけ力を入れているのに、皮膚が引っ張られる痛みすら感じられない。

「どうして……こんなことって……」

接合部から滲んだ血が、仮面の魔力で修復されていく。

恐怖と絶望に、ただ鏡を見つめて茫然としてみると、

——トントン

部屋のドアが優しく叩かれた。

「誰？」

できるだけ平静を努めて声を出したものの、声は掠れてしまい、ドアの向こうの相手に届いたかどうか自信がない。

「ロザミア……俺だけど」

控えめな男性の声。少し甲高きの残る少年特有のこの声は……。

「団長？」

最悪のタイミングだ。今一番会いたくない人であり、いつかは伝えなければならぬ相手でもある。

いや、伝えるのならば早いほうがいいか。

「いいわ、入って」

声をかけて数秒、ためらいがちにドアを開けて入ってきた彼は、頭を掻きながら目を泳がせている。

「それで、なんの用かしら」

一向に会話を始めない彼にやきもきして、私は少しイラついた口調で聞いた。

そうすることで、やっと彼は口を開いた。

「その……大丈夫？」

言葉を選ぶようにゆっくりと彼が問いかける。

——大丈夫？ 仮面のことはまだ知られていないはず。じゃあ、私の何が……

ああ、そうか。至極簡単なことに思い当たった。

彼は家族を失った私を心配してここに来てくれたのだ。

そんな簡単なことも思いつかないほどに、今の私には余裕がなくなってしまった。た。

「実感が湧かないのが本当のところ。

……それに、私がやるべきことは変わらないわ
そう。変わらない。

帰るべき家があるなろうが、仮面が剥がれなくなろうが、私は復讐者であり続ける。
……どうしたって、もう戻れないのだ。

「大丈夫。私なら心配いらないわ。

今更この程度のことでは揺るがない」

「この程度のことなんて言うなよ」

少年が涙目で訴える。

そうだ。彼はいつだって他人の痛みを自分のもののように感じてしまう。

感受性が強いのだろう。

それは誰かの救いになるだろうけど、同時に己を傷つける刃にもなってしまう。

——同情ならいらないわ。

「優しいのね、あなたは……」

だからこそ突き放したいのに、私の口からは本音が漏れてしまう。

それでも、これ以上の迷惑はかけられない。覚悟を伝えるために私は彼に背中を向けた。ここからは、一緒に進むわけにはいかない。

「……私はこの艇を降りるわ。」

ここから先は、ただの私怨だもの」

熱い衝撃が体を覆う。

少しして彼が背中から抱きしめてくれているのだと気付いた。

彼が私の耳元で、私の名前を囁く。

熱に浮かされたような彼の声がかくすぐったくて、少し嬉しい。

彼の方に振り向いた私の顔に手をかけてゆつくりと仮面を――

仮面を剥がそうとした彼の表情が堅くなる。

――大したことじゃないの。放っておいて。

「もう外れないの……」

隠そうとしても本音を言ってしまう私に、強がりには意味をなさない。諦めて私は本当のことを告げることにした。

「きつと……もともと制御できるような代物じゃなかったのよ。

私は完全に仮面の呪いに飲み込まれてしまった」

仮面に飲み込まれるということは、力の暴走がより強烈になるということ。

それがどういふことか、私の近くにいた彼ならばよくわかってしまうことだろう。

「だから、私は団を抜けるわ。お別れよ、団長」

彼は一瞬だけ悲痛な表情を浮かべると、すぐに首を振り「行くな」と言う。

けれども仮面の呪いはきつと彼を、彼の大事なものを傷つけてしまうから……。

「ごめんなさい。私はもうここにはいられない」

「君を一人にはさせたくない」

まだあどけなさの残る真摯な瞳に、胸の奥が疼く。

羨望と安堵と罪悪感、そして欲情。

「やっぱり、あなたはお節介で、お人よしだわ」

私はきつと、長い旅の間に彼を信頼しきってしまったのだろう。そして、それだけではなく……。

「ねえ、もしも……」

意味のない質問だと気付いて口を閉ざす。

「私以外の団員が同じような目にあっていたら、あなたはどうするの？」

それでも、私の口は勝手に動き、心に押しとどめていたかった質問を吐露してしまう。

「放つてはおかない」

そう、あなたはそういう人だ。

私を抱きしめてくれるのも他意のない優しさにすぎない。

勘違いしてしまいそうになる感情を押し殺す。

……私は彼の『特別』にはなりえない。

「あなたのそういうところ、嫌いだよ」

そんな言葉を伝えたいわけじゃないのに……。

仮面は私の本心を表にさらけ出す。

きつとそうすることで私が孤立することを望んでいるのだ。

けれど、どうして……？

答えは明白。

仮面が私を支配するのに、仲間や友人といった存在は邪魔なのだ。

私はただ、コレの求めるままに闘争を続けなければならない。

今まででだつてずっと一人で戦ってきたのだ。

これからだつて……

(これから？ これから私はいったい何と戦うというのだろうか)

(そうだ、復讐。私は復讐をしなければならない)

どのみち彼には嫌われた方がいい。

そうすれば、なんの気兼ねもなくこの艇を離れることができる。

彼は私をまっすぐに見つめている。

……その表情は、まだ私を引き留めることを諦めていないようだ。当たり前前だ。彼はどうしようもないくらい誰にでも優しい。

「嫌われても構わない。これから、ずっと傍に居てほしい」

ひと言ずつ選ぶような喋り方ではあったけれど、その言葉に迷いはない。

「ちよつと何言ってるかわからないわ。私を傍に置くメリットはもうあなたにはないはずよ」

だからこそ私は彼に冷淡に事実を突きつける。

その行為の心苦しさに、私は認めざるをえなくなる。

私の最後の未練は、きつと彼なのだ。

「キミが好きだ」

「本気？」

「こんなタイミングで言うべきことじゃないかもしれないけど……」

——私は、そんな馴れ合いをするつもりはないわ。

「ありがとう。私もあなたが好き」

ああ、まったく。仮面に少しだけ感謝してしまいそうになる。きつと言えなかつたであろう言葉を、いとも容易く表に出してしまう。

「私を、あなたに繋ぎとめて」

繋ぎとめてもらつて、私は一体どうするつもりなのだろう。

自分の衝動も欲望も理解できないけれど、もう後には引けない。

私は彼の肩に手をかけると、目を瞑り唇を重ねた。

少しカサカサしている男の子の感触。

短いキスから唇を離すと、彼の手が私の背中に回された。

密着してギュツと抱きしめられる。

「どこにも行かせない」

囁く彼の声が麻薬のように身体を熱くさせる。

「どこにも行かないわ」

もう本音も建前も関係ない。満足したように彼が力をゆるめると、再び私たちはキスをする。

お互いの唾液を交換する、脳髓まで蕩けてしまうような深い口づけ。

再び強く抱きしめ合うと、彼が姿勢を低くして私の胸に顔を埋めた。

顔を擦り付けようにして求める姿が、なんだか可愛らしい。

一通り堪能すると満足したのか、再びのキス。

彼の舌先が私の首、肩と降りていき、最後に脇にたどり着く。

「んんっ!? こら、やめなさい」

くすぐったさと恥ずかしさに彼の顔を引き離すと、すごく残念そうな顔をしていた。

「本当にバカなんだから」

ふたり顔を見合わせて笑いあう。

——ああ、そう。私はまだ笑えるのね。

仮面の張り付いた右頬の感覚はないけど、それでもよかった。

そのまま全身で求め合い、もつれるようにしてベッドに倒れ込むと、お互いの服を脱

がしあう。

恥ずかしくて怖いけど、温もりがそれ以上に愛おしい。

お互いのぎこちない行為に、私たちは安堵し、笑い合い、求め合い、幸福の中でその絶頂を迎える。

私は、彼と生きていってもいいのだろうか。

スヤスヤと寝息を立てている彼の髪を撫でながら、そんなことを考えてしまう。
……そんな未来も悪くない。

彼の頬に優しくキスをして、金属の擦れ合う音を極力抑えながらゆっくりと剣を抜く。

もはや彼は私の心の拠り所になってしまった。

家族はもういない。けれど、復讐以外に残ったものもある。

振りかぶり、愛を交わした男の心臓を一思いに……

……!?

私は今何を考えた？

私は、今、何をしようとしている？

唐突に戻ってきた己の意思と感触に怖気が走る。

(いつのまに剣を握った?)

振りかぶった先には彼が眠っている。

……私は、大切な人を、殺そうとしたのか？

意味の分からなさに混乱し思わず顔を覆ったが、その理由は手に触れた冷たい感触で理解できてしまった。

私は仮面に体だけでなく心まで侵されていたのだと。

私の気配を察知してか、彼が身じろぎをした。

(お願い、どうかこのまま起きないで……)

願いと裏腹に、彼が薄く目を開けて微笑む。

穏やかな表情。

血に濡れた道を歩いてきたというのに、私とは大違いだ。

彼は大志を持って大空に臨み、

私はどす黒い復讐心を抱きながら大地をのたうち回っている。

助けて……私も、この終わりのない復讐から解き放たれたい。

あなたの隣で、幸せになりたい。

涙を流しながら、縋りつきたい気持ちで開いた口からは、

「コ……コ……」

思わず己の口を手で押さえつける。

違う。そんなものは私の本心ではない。

そうであっていいはずがない。

私は……私は……

——コロシテヤル。

どうして。今までは本心が漏れることがあっても、本音が言えなくなるようなことはなかった。

うめき声を抑えつけ、私は彼に「出て行って」と告げる。

心配するような眼差しすら、今の私には恐ろしい。

彼に何かしてしまいそう。温もりを知ってしまった今、その恐怖は耐えきれないほどに重い。

「お願い……一人になりたいの。ごめん……」

腑に落ちない顔をしている彼に、仮面の力が暴走しそうなのだと告げる。

「大丈夫、どこにも行かないわ」

ああ、嘘がポロポロと、私の口から漏れ出ずる。
本音を言ってしまうればどれだけ楽なことだろう。

——行かないで、そばに居て。

部屋から出ていく彼の背中に、声をかけてしまいましたくなる衝動を抑え込む。
やがてドアが閉まると、私はベッドに伏して彼の残り香に身をゆだねて泣いた。

このまま私がここに居たのでは彼を傷つけてしまう。

そうなってしまえば、本当の意味で私はきつと仮面に飲まれてしまうだろう。だから、私はここを発たなければならぬ。

——ねえ団長。私は本当にあなたのことを、愛してしまっているのよ。

そうだ。ここを発つ前に手紙を書こう。

いつかまた戻つてくれるように。彼が心配しないように。

私の心がこれ以上蝕まれないように。

長い時間をかけて私は自分の心を綴る。

手紙を書き終えると、東の空はすでに白みを帯びていた。

艇から降りる準備はそんなにはかからない。

もともとここに長居する気はなかったのだ。自分でも思ってた以上に荷物は少ない。

一人に戻るだけだ。それに私には帰る場所がある。

東の空が明るんできている。

物音を立てないように部屋を出て、最後に一度だけ、彼と過ごした光景を目に焼き付けようと部屋の中を眺める。

切り刻まれた手紙が、窓から風に乗って外へ流れていった。

(ああ、本当に私は、もう手遅れなのね……)